

『昔話ノート』を読む

—「手法」「道具立て」が対象を「発見」し、「形作る」営みについて・「百話クラス」から「二百話クラス」「三百話クラス」まで—

高木史人

一、はじめに

小稿は『口承文藝研究』18に著した「『昔話の語り手』の一九〇〇年——『数百話クラス』の語り手の誕生」の続稿である。18号では、「昔話の語り手」としても彼らの生きられていた時代と無縁ではないことを論じたのだが、ここでは、昔話の「フィールドワーカー」も同様であることを考えてみようと思う。特に、第二次世界大戦後、柳田國男の影響の下に、新潟県長岡市を中心に活躍した水沢謙一（一九一〇年生—一九九四年没）について、彼の「手法」「道具立て」がどのようにして「昔話の語り手」という対象を「発見」し、「形作っ」ていったのかをみていこう。水沢謙一の二冊の著書『昔話ノート』（一九六九年、野島出版刊）と『昔話を追って』（一九七九年、新潟日報社刊）とを右に注意して読み進めよう。

二、「百話クラス」の発見

水沢の『昔話ノート』と『昔話を追って』とは、水沢が長年にわ

たって書きためたさまざまな文章を、それぞれまとめて一冊の書物としたものである。『昔話ノート』は一九五六年から一九六九年までの、『昔話を追って』は一九七〇年から一九七九年までの、水沢の主要な文章を網羅している。実をいうと、この二書を購入した一九八〇年頃、まったく恥ずかしいことに、筆者はこの二書の持つ価値が全く分からないでいた。というのは、この二書に収められている文章群は概ね短いものが多く、しかも、どれも似たり寄ったりの内容で、最初の数編を読んでしまえば、後は読み飛ばしても構わないという印象を受けたのである。つまり、「研究書」というよりは「随筆」だという判断をしたのだった。ところが、それから十数年を経て、この二書を「昔話研究史」として、就中「昔話の語り手」の発見の手つきや道具立てを知るための史料として読み直してみると、これらの文章群は一九五六年から七九年までの貴重な証言集となっていることに、改めて気づいたのだった。そうして、一見、同じことが反復するかのように見える文章群の中に、ちょっとした「時間」の経過によって微妙な差異がみられ、例えば「昔話の語り手」の「百話クラス」から「二百話クラス」へ、さらには「三百話

クラス」へという語り手が記憶しているとされる、「話型」の数(話数)にも明確に「研究史」が刻みこまれていることを教えられたのである。

さて、水沢は「柳田國男」との出会いを次のように記している。

「桃太郎の誕生」を読んだのは、戦後、昭和二五(六年)のころでした。そのころ、私は三〇代の後半で、村の小学校長をしていました。村の郷土誌を書こうとして、残存した断片的な古文書では、とても村の歴史を書くことができず、むしろ村の伝承を追って民俗誌を書いたのも、柳田民俗学を知ったからでありました。「富曾亀民俗誌」という本でした。

東京の神田古本街、一誠堂で、柳田國男先生の「桃太郎の誕生」を見つけたのが初めてでありました。先生の本を片っぱしから集めて、むさぼるように読んで、民俗学を学びました。先生の「昔話採集のしおり」(昭和八年)、「昔話寛書」(昭和一八年)、「昔話採集手帳」(昭和一一年)、「日本昔話名彙」(昭和二三年)などを手にして、実地のフィールドを歩きながら、繰り返し読みました。「日本昔話名彙」などは、ポロポロになってしまいうほど愛読しました。「富曾木民俗誌」などは、昔話にウェットがかかって、柳田先生から、昔話集としても面白いといわれたのも、心に残っています。

いつか、やがて柳田先生にお目にかかるようになり、いろいろ教えてもらったのもなつかしいことです。毎年学会にも発表したり出席したりして、成城町のお宅にも伺いました。先生

の教えを、いつもメモにとりました。(「昔話研究とはじめ」
初出一九七八年)

この後、水沢は、柳田が『昔話寛書』の改版(一九五七年)に際して、序文に自分の名が引かれたことを述べ、さらに「昔あったんがな」(一九五六年、長岡史蹟保存会刊)、「とんと昔があったげど」(第一集は一九五七年、第二集は一九五八年、未来社刊)などの水沢の初期の昔話集刊行に触れた後、「そして、戦後、日本で昔話採集がなお可能だというスタートにさえ、はからずもなりました」と、自分の昔話のフィールドワークが戦後の昔話研究をリードしたことを自負している。

ここで水沢がいつ柳田に出会ったかという問題は、とりあえずそれほど重要ではない。むしろおさえておきたいのは、水沢が柳田の『昔話採集手帖』(一九三六年刊)と『日本昔話名彙』(一九四八年刊)を、とりわけ後者は「ポロポロになってしまいうほど愛読し」という一条である。それというのも、これらの書には柳田の昔話の「型」や、「一〇〇」という道具立てがあった。^(注)「ポロポロになってしまいう」とは、そのような柳田の用意した道具立てが、水沢の手に渡されていく経緯そのものだろう。ただし、そこでは、柳田が「昔話の分類」ということは、多くの採集者が熱望しているほどには、自分などはその急務を認めない(傍点筆者)と述べながら「二百」という数を昔話採集のための道具立てとして出していたのとは、相違する点がある。それは、『昔あったんがな』の序文(「昔話について」初出一九五六年)の末尾に、

特に「昔話名彙」によって、体系的な採集がいくら出来たこととは喜ばしい。

と、『日本昔話名彙』の、柳田による手法もしくは道具立ててであったはずのものが、道具立てとしてではなく「体系」として認識されていた点である。いったいに、「柳田國男」の用いた手法や道具立て（「常民」「昔話」「世間話」「民俗語彙」その他）が、手法や道具立てではなく、客観的な実在、あるいは体系と観じられるというの、民俗学史の中ではよくみられることだが、ここでもそれが例外でなくみられるわけである。

採集に出かける時には、「日本昔話名彙」をいつも持参して、一冊がポロポロになってしまった。系統的な採集をするためにも好伴侶であり、話者にヒントを与えるにも便利な本であった。（二十村郷の昔話」初出一九五八年、傍点筆者）

これは、水沢が『日本昔話名彙』を携えてフィールドワークに行き、語り手の前で書物を広げて昔話を聞き出した可能性があることを示す例であるが、このようにして「日本昔話名彙」をフィールドの中でも使用していくことによって、昔話の「型」を一八三、その内主要な「型」を二〇〇とする枠組みが水沢の心身に構造化されていったのではあるまいか。（そういえば『昔あったてんがな』の一八九話の冒頭に置かれたのは、「百物語」だったが、これは出来過ぎか）。それはさておき、このような一〇〇〇という数の道具立ての中で、「昔話の語り手」までもが、水沢が聞き出した話の「数」によって初めて位置づけられ、意味づけられていった、すなわち発見

されたといえるのである。^{（注四）}

水沢が、「昔話の語り手」を話の数——話数によって呼称するのは、『昔話ノート』の中では「越後の民話」「越後の民話」の「しながき」（初出一九五七年、未来社刊）に、「五十話クラス」と「百話クラス」との語がみえるのが最初である。特に「百話クラス」の語についてみると、

年来、私は昔話採集に微力を進めてきましたが、古志郡の山深く、百話クラスの二人の老女にもめぐり合うことができませんでした。八二歳と九十歳の老女で、柳田先生の言われるような伝承タイプの方で、大体が話が好きで、聞いたら忘れられない、強い記憶力を持ち、昔話好きの祖父や祖母の血をついだ方であります。（傍点筆者）

とある。柳田の言う（おそらく口頭で言われたのだろう）「伝承タイプ」の語と「百話クラス」とは同じことだとしながらも、この一九五七年以降、水沢は「伝承タイプ」と「百話クラス」の二語を併用しつつ、次第に水沢の用語である「百話クラス」の方を強調していくのである。

一九五八年、水沢は『昔話採集』（『文学』26—8、特集・民話、岩波書店刊）を著した。ここには水沢の「昔話の語り手」の見方が基本的に出揃っていて、興味深い。水沢はその冒頭に、

年来、私は土・日・休日などを活用して、越後における昔話採集に、微力をつづけてきた。これまで山の奥在所の野や里を歩きまわって、多くの老翁老媪に接し、やがては数十話や百話ク

ラスの伝承者の何人かにも、運よくめぐり会うことが出来、その聞き取り、書き取った数冊の昔話集におさめることが出来た。(傍点筆者)

と記していた。この文が、先に引用した「越後の民話」を下敷にしていることは容易に察せられるが、「柳田先生の言われるような伝承タイプ」の語句は削られ、「数十話や百話クラス」の語句だけが、論文の冒頭に提示されるのである。そうして、ここでは、「百話クラス」として、

長島ツル(一八六八年生) 一三〇話余

井上イマ(一八七四年生) 一〇三話

笠井ツル(一八六六年生) 九〇話

石田ヨミ(一八六三年生) 一四〇話余

笠原政雄(一九一八年生) 一一〇話余

が紹介され、これらの「百話クラス」や「数十話クラス」の伝承者は、「今の世には得がたい貴重な存在」だとした上で、これらの人々がどのような条件の下に伝承者になったのかを、「社会的文化的地理的条件」つまり語り手の外側の条件と、「人間的個人的家庭的条件」つまり語り手の内側の条件とから分析を試みたのである。

先ず、前者の条件としては、

私の場合、山方の村や里方の村での発見で、割合に交通量が少く、他の村との接触も少く、文化の歩みも緩慢で、何となく素朴さと古風さを持ち伝えている村であった。(中略)そのような村には、伝承者の顔つき、というようなものがあって、何と

なく、昔話の魅力に富んだ印象を与える。(傍点筆者)

という。中略の部分には行き止まりの「袋の村」だと記されている。その部分はしばしば引用されるのだが、傍点部に「何となく」「伝承者の顔つき」「印象を与える」とあるように、何とも曖昧とした、近代に入って形成されたといわれる故郷のイメージ以上の条件は述べられていない。

それに比べると、後者の条件は、曖昧な表現も多いが、相対的には、より具体的に、説得力のある部分が多い。

伝承者には、たしかに伝承の家系というべきものがあるが、その家の祖父母や父母などの伝承者から聞いた昔話を、忘れずによく覚えていて、家筋の伝承者タイプがうけつがれ、その素質が遺伝し、また感化されるものらしい。

(中略)

私の会った伝承者の多くは、老翁老媪の、いわゆるカタリジサ・カタリバサであったが、親父盛りや嬬盛りの頃は、子供の頃にきいた昔話も多忙の中に忘れて語りきかせる暇もないが、年老いて、自分が昔話をきいた頃のような顔を見るようになると、自然思いついて孫に語るようになるという。

(中略)

老翁よりは老媪に、すぐれた伝承者が多い。

(中略)

伝承者の多くは無学で、読み書きもろくに出来ない人々であるが、実に強い記憶力の持主である。山のインテリや野のインテ

りである、学、あ、か、物、知、り、達、は、昔、話、等、は、全、く、軽、蔑、し、て、い、る、の、で、ある。昔話伝承者は、無学で、素朴な、心あたたかき、平凡な村人で、それほど多く昔話を知っているとも知らずに、おびただし量の昔話を、質のすぐれた昔話をひそかにたくわえているのである。

伝承者にだんだん接している中に、「これが伝承者だな」と第一印象にピンとくるものがある。伝承者に特有な一種の風格があって、素朴で、控え目で、おちついたタイプで、口が重く、話し出せば次々と出てくる。その目つき、口もと、顔つき、話し方に、共通した一種の印象がある。とりわけ、明治初年生まれか、それ以前の生まれの農家の老媪たちには、前代のなつかしい風格がある。

それから、最初に十話も語り得る話し手ならば、大ていの場合、数十話クラスか百話クラスの伝承者であった。(傍点筆者)ここに記されている条件は、その後、一九七〇、八〇年代に展開していく「昔話の語り手論」の先駆となるものであり、議論の出发点となるものだった。水沢の右の条件は、先に挙げた五人の「百話クラス」の(ただし、笠原政雄は除く)語り手から帰納してきたものであった。それは、「明治初年生まれか、それ以前の生まれの農家の老媪たち」という点に明らかであり、また、「無学で、読み書きもろくに出来ない」云々の部分は、柳田の構想した「目に一丁字なき人」という道具立てと関わって捉えられる。そのような「無学」な人が「百話クラス」の語り手であることを水沢は力説する。だが、

それにしても、どうして「百話」なのか、を彼は説かない。これについては、既に推論したように、『日本昔話名彙』などの柳田にみられる「一〇〇」という数、その道具立てが作用していたのだろうが、そのことを、水沢のフィールドワークの報告からより具体的に跡づけてみよう。

水沢が『日本昔話名彙』を携帯しながらフィールドワークをしたことは、既に述べた。ここでは、水沢が「百話クラス」の語り手たちとどのように接してきたのかを、長島ツル媪(一八六八年生)についての、水沢の記述によって詳しくみてみよう。

一九五七年に出版された『とんと昔があったげど』第一集(未来社刊)の「序」(「長島ツル媪ばあさんの昔話」によると、水沢は一九五六年から五七年にかけて十数回のフィールドワークを行い、一三〇話近くの昔話を聞いたという。水沢はそこに「このような伝承者には、よもやめぐり合うことはあるまいと思っていた」と記しているが、その話数が「一〇〇」に達するまでの経緯は次のようである。「おれが昔聞いた昔話はこうだ」と、遠い記憶の糸をたぐって、語り出して、六・七十まではスラスラと出たが、それ以後は急に思い出せないで、私の方で、ヒントを出して思い出してもらった。

つまり、六・七〇話までは、ツル媪の方から語り出していたものが、そこから一三〇話近くまでは、水沢の方がヒントを与えて話を引き出し、話数の積み上げを図ったのである。この点について、昔話のフィールドワークをしたことのある人ならば、誰しも、このよ

うな経験があるだろう。たとえ、目の前に『日本昔話名彙』を置いてはなくても、昔話が語り手と聞き手との関係の中に顕れ現れることは当たり前のものであり、それ故に聞き手水沢がヒントを与えることは納得できる。問題は、ここでは、話数が一四〇余りであったことだ。それには『日本昔話名彙』の問題だけではなく、「聞き書き」という道具立ての問題もあつたと思われる。つづけて引用しよう。

ツル婆さんは、歯が悪くなり、それほど早口でなく、言葉もすっかりしているが、それでも興いたれば、相当な早さになってくるので、記録がついていけない。あらかじめ打ち合わせしておいて、どうも興をそぐことになるが、時にストップをかけて、記録を取った。そのうちにはすっかりなれて、記録の呼吸をのみこんで、私の鉛筆の手許を見ながら、実にうまく語ってくれた。時々休んでお茶を飲んだり、世間話をしたりした。

ここでのフィールドワークは、今日のテープレコーダーという道具立てを用いたものとは異なり、ノートへの記録、つまり「聞き書き」なのである。このテープレコーダー録音とノートへの聞き書きという道具立ての相違は、ただ単に、前者が進歩して語りに忠実であり、後者は労多くして実り少ないというようなものでは、決してない。テープ翻訳が語りに忠実だという印象を与えるのは、それが音声の「意味」的な部分を、聞き書きよりは上手に文字化（翻訳）していると思ひこまれるからである。だが、たとえば、haruhiと

語り手が言った部分を、文字化する時には、アルファベットの他にも、晴れの日、はれの日、ハレの日、ハレノヒ……などといくつもの記述の揺れが起こり、その文字の種類によって受けるイメージが異なることは、テープ翻訳も聞き書きも同じなのである。音声の「意味」的部分以外、たとえば、その人の声質、音色、高低、強弱などについての再現不可能性もテープ翻訳、聞き書き、共に等しい。そうして、一話の語りの調子全体を音読してみると、これはむしろ聞き書きの方が読みやすい場合が多い。つまり口の「語り」を目的の「読み」物に転換する場合には、聞き書きの方が有利に作用するともいえる。一方、フィールドワーカーにとって、文字化をするに際しての労力という点では、テープの方が格段に便利で効率的である。水沢が記しているように語りの途中で腰を折ることもないし、一旦録音をしておけば、文字化の作業は後でも行える。ということも、逆に、聞き書きは、語りの場での語りの収録を遅らせて、話数を増やさないことにもつながるのである。このような状況の中で、水沢の報告する「百話クラス」は発見されて——形作られていったのである。

先に水沢が「昔話採集」の中で紹介していた五人の「百話クラス」は、その発見され、報告された順序からいうと、笠井ツル媪の「昔あつたてんがな」（一九五六年刊）が最も早い。これには「百話クラス」「数十話クラス」の語は見当たらない（この時点で笠井媪の話数は八十九話だった）。次には、この長島ツル媪の『とんと昔があつたげど』第一集（一九五七年）では、「百話クラス」の語

を用いてはいるが、「このような伝承者には、よもやめぐり合うこととはあるまいと思っていた」という。それが次には、川上イマ媼を紹介する」とんと昔があったけど第二集（一九五八年、未来社刊）の「序」（「二十村郷の昔話」）になると、

これら百話クラスの伝承者は、全くその人柄によることで、何れも話好きで、（中略）一種の風格が共通しているように思われ、その顔つきや話し方や態度に、あ、このタイプだ、と印象深く、ピンとくるものがある。（傍点筆者）

と「百話クラス」の存在に確信を深めた。そうして石田ヨミ媼と笠原政雄氏とを紹介した」とんと一つあったてんがな（一九五八年、未来社刊）の「序」（「とんと一つあったてんがな」）では、石田ヨミ媼について、

あのたまぎの並木路を歩いて、始めてお婆さんに会って、「このお婆さんは伝承者タイプの顔つきだが、まず百話は語るだろう」と、第一印象を受けて喜んだ。これまでの採集で、成功や失敗を重ねている中に養われた、一種の勘であった。しかし、この勘があたってくれたらいいがなと、内心不安でもあった。（傍点筆者）

と、総論風ではなく、「石田ヨミ」という一人の語り手について「百話」クラスであることを見抜くように——もともと内心は不安だが——なったというのである。このようにして、水沢は一九五五年から五八年にかけて、たてつづけに五人の「百話クラス」を発見し、形作っていき、一九七九年までに一八人の「百話クラス」を発

見することになる。この中で、「百話クラス」を発見する「勘」は次第に自信を深め、「不安」が取り払われていく。たとえば、一九六六年に出版された『おばばの昔話』（野島出版刊）の「池田チセばあさんの『ムカシ』」（「チセばあさんの話」）では、池田チセ媼（一八九一年生）について、

はじめに十話も聞いたこと、話の語り方、話の質、顔の表情などの印象から、これは前にもめぐりあった、いわゆる百話クラスの伝承者タイプだと、ピンときた。「おばあさんは、きつと、百話は知っているの。よう思い出しているの。」といったら、「なに、そんなに知っていろいろばの。」と、静かに笑っていられた。それほどに、控え目であるだけに、すぐれた語り手にめぐりあったものだ、大きな期待をもって喜んだ。（傍点筆者）

と、不安を感じたという条りは、ない。のみならず、水沢が池田チセ媼（インフォーマント）に向かって「百話」という語を持ち出している。いったいにフィールドワークの場の全体から「一話」という基準を立てて、場を分節化して、昔話の「話数」をカウントしていくというのは、フィールドワークの「話型」という考え方を抜きにしては起こり得ない。たとえば、先に、水沢が長島ツル媼へのフィールドワークを記した箇所、昔話を「聞き書き」するあい間に「時々休んでお茶を飲んだり、世間話をしたりした」と、水沢の目からみて「昔話」とそれ以外の「世間話」とは区別されている。しかし、このような分節化は、長島ツル媼からすれば、水沢の「聞き書き」のノートを取る手つきを通して、つまり水沢（フィールド

ワーカー)の心身を通して新たに獲得された場を分節化する方法だったのであり、本来、昔話を語る場合は、昔話もそれ以外の談話も含めて一続きに認識されていたのであらうと思われる。この池田チセ唄の場合は、「話数」が十話に達した時点で、水沢から「百話」という具体的な期待値が示された。昔話を「一話」ごとに分節化し、カウントしていく手つきは、池田唄にとっておそらく新鮮な驚きだったろう。その後、池田唄は、熱心に、自らの「百話クラス」を達成すべく、努力を開始する。水沢によれば、病気がちだった池田唄は、「ムカシ語りをするようにしてから、シャンとしてきて、元気になったという」。そうして、八十六話まで「話数」が出たところで、

五月にも、六月にも、おばあさんの「ムカシ」の思い出し勉強がつづいた。思い出した話を、自分流に題のようなものをメモにとった。そして、「ムカシ」がたまると、ときに、長女のミツイさんが、電話をかけて、早く聞きにくるよう、知らせてくださる。ときに、おばあさんが自分で、「先生、話が出たすけ、はやくきてくれの。」と、学校まで私を呼びにこられたほどだった。(傍点筆者)

と、語り手自らが「メモ」をとって、話を思い出し、——カウントをしはじめてるのである。池田唄は娘の嫁ぎ先へ行っても、「はて、おら、「ムカシ」の勉強しんばならん。水沢先生が「ムカシ」を聞きにくるすけ、お茶なんか飲んでいらんねや。」と、うちへきて、思い出してはメモをとったという。

(傍点筆者)

という調子である。水沢は、そのような池田唄に対して、

「おばあさん、もう十四話で、百話となるので、よく思い出しの。(後略)」(傍点筆者)

と、ここでも「百話」の語を用いて、池田唄を励ましている。すなわち、柳田の「一〇〇」という道具立てに導かれ、水沢によって見され、形作られた「百話クラス」が、ここではさらにインフォーマント自身に自覚された上でフィールドワークが進行していった。このようにして、「百話クラス」の語り手は形成していったのである。

三、「昔話研究者」の一九五八年

——あるいは「二百話クラス」の発見——

水沢が「昔話採集」を『文学』に発表した一九五八年は、昔話研究史上、もう一つの大きな出来事があった。それは関敬吾著『日本昔話集成』第三部笑話2の出版(即ち『日本昔話集成』全六巻の完結、角川書店刊)である。この『日本昔話集成』が柳田の『日本昔話名彙』と決定的に異なるのは(昔話を完形昔話と派生昔話とに二大別したのが『日本昔話名彙』で、動物昔話・本格昔話・笑話・形式譚・補遺とに分類したのが『日本昔話集成』という内容的相違もあるが)、水沢ら当時のフィールドワーカーの目からするならば、それは、「話型」の数の飛躍的増大だった。水沢は、これまで見てきたように「日本昔話名彙」を「ボロボロになってしまふ」まで愛用

したと記しているが、一方、『日本昔話集成』を使用してフィールドワークを行ったという記述は、見当たらない。しかし、そのことは、水沢が『日本昔話集成』を用いていなかったということではなかった。水沢にとって『日本昔話名彙』は携帯書であり、『日本昔話集成』は机上で用いる補助資料といったところだったのではなからうか。というのは、水沢が『日本昔話集成』全巻完結の二年前の一九五六年に出版した『昔あつたてんがな』の「目次」をみると、

(一) 昔話民俗語彙

(二) 本格昔話

(三) 笑話

(四) 動物昔話

(五) はてなし話

となっていて、「(五)はてなし話」は形式譚であるから、(二)〜(五)の分け方は、『日本昔話集成』に従っている。だから、水沢は早くから『日本昔話集成』の分類をも知り、自ら活用していたのである。また、一九六四年に水沢が出版した『越後のシンデレラ』(野島出版刊、この書は、同一の話型群の昔話ばかりをフ、イトルド、ワトクして出版した昔話集として、水沢の後の『黒い玉、青い玉、赤い玉』一九七二年、野島出版刊や『蝶になったたましい』一九七九年、野島出版刊などと共に、空前の昔話集といえる)に収められた「『ぬかぶく、こめぶく』の昔話について」「『うばかわ』の昔話について」の二論文の中で『日本昔話集成』を参照した旨が記されている。水沢のシンデレラ研究は、『日本昔話集成』完結後の一

九五九年に文部省科学研究に採択されているから、『日本昔話集成』の影響下に同一話型の収集が行われていったとみられる。しかし、水沢が、昔話の話型の総数について言及するのは、やや遅れて一九六六年の「百話クラス伝承者の特色」(『おばばの昔ばなし』の巻末)においてである。

もともと、昔話には、その組み立てている要素による一定の型があつて、よき伝承者は、伝承に忠実で、この型を決してくずすことがない。その昔話の型は、日本では六百、世界では七百といわれている。

(中略)

伝承者のなかにも、数的には、数話クラス、数十話クラス、百話クラスと、ピンからキリまである。

ここでの「昔話の型」の数は、『日本昔話名彙』のそれでは、決してない。一方、『日本昔話集成』巻末の「昔話の型」では六〇二の話型数になるので、世界はともかく日本の話型数について、水沢は明らかに『日本昔話集成』に拠っている。ということは、『日本昔話名彙』を道具立てとして始まった水沢の昔話のフィールドワークは、徐々に『日本昔話集成』という道具立てをも無視し得なくなつていったといえよう。

「話型」の数が増加するのは、「一〇〇」という柳田の手法、道具立てから離れていくこともある。「話型」というものは、柳田が「百の主なる型」と、ちょうど切りのよい数で示すことができた(示すことをした)ように、それは本来、フィールドワーカーの側

の手法、道具立てであったはずである。それが、関の『日本昔話集成』では、むしろ自然物のような客観的実在だと信じこまれ、——客観的実在ならば、それは外国のそれと同等に比較が可能だということ、国際比較も可能になるとする。実際、『日本昔話集成』の大分類がアールネとトンプソンの『昔話の型』に従っているのは、このような目論見があったからだ——ここではフィールドワークのための「手法」「道具立て」という認識に無自覚だったために、「話型」は昔話研究者の、特にフィールドワークでの統御可能な範囲を越えて膨張しつづけ、その結果が六〇二という「話型」の数になってしまった、ともいえる。

さて、そのような膨張した「話型」が準備されたところへ、次にはそれ以前のインフォーマントが、それぞれの生を全うしてゆき、自然と筆者が当該前号論文で論じた一九〇〇年、明治三〇年前後生まれの、書く営みをも心身に構造化した世代のインフォーマントにフィールドワークの焦点が定められてきた。ここでは、先に触れた池田チセ媪が「メモ」をとっていたことでもわかるように、たった一度のフィールドワークではなく、たいいてい、「昔話の語り手」へのフィールドワークは回数を積み上げていく傾向があり、「メモ」はインフォーマントの記憶する「話数」を増加していくことにもなる。

そうしてこのようなインフォーマントとフィールドワーカーの双方を取り巻く状況の変質のさらなる一つに、ノートへの「聞き書き」から「テープレコーダー」録音へという、フィールドワーカーの側

の手法、道具立ての交替があったのである。

長島ツル媪のところまでみてきたように、水沢は当初、ノートへの聞き書きの形でフィールドワークを始めた。水沢がどのようにノートを使っていたのかを示す例がある。

特定のテーマでなく、系統採集をする場合には（ある一つの「話型」だけを追い求めるのではなく、ある特定の地域において多くの話を聞こうとする場合には（筆者注）、はじめに、お婆さんの知っている昔話を一〇話ほど、その題名をノートして、それから順に聞き書きをとる。それが終わったらまた一〇話ほどの題名をノートする。話者が思い出せなかったら、こちらでヒントをドシドシ出して、題名をノートする。

（中略）

話者の語った昔話は、語ったとおりを記録すべきであって、採集者によって、不必要な修飾をしたり、筋をまげたり、昔話の文学化したりは絶対にしないことである。語るがままに記録をとれば、しぜん方言もまじえ、ローカル・カラーゆたかとなる。とにかくできるだけ、もとの形のままに記録することである。

（「昔話採集のこと」初出『日本民俗学大系月報』12、一九六〇年、平凡社刊）

「聞き書き」が一話ごとの題名を明確に記す形で行われるということは、「話型」という手法、道具立てに則った形でフィールドワークをしたということであり、また「話型」として登録されていないものは自ずから排除されやすかったということである。また、後半

の「語ったとおり」が、「方言」や「ローカル・カラー」への配慮であることは注意してよい。先の『昔あつたてんがの』の目次でも、冒頭に「昔話民俗語彙」という部立てが試みられていたが、「聞き書き」という手法では、ノートに語、語句、文を次第に書き進めていくのだが、その時、場の対話性は記録から消去されるが、代りに書かれる文字列、特に語、「方言」への注意は喚起されやすくなるのである。対するテープ録音では、逆に場の対話性、インフォーマントとフィールドワークとの関係性への注意が促されやすくなる。それはさておき、水沢の「聞き書き」に関する最終的な消息は、どうやら一九六三年あたりかと思われる。それは、『栃尾郷昔ばなし集』（栃尾市教育委員会刊）の解説（「栃尾郷の昔話」）にみえる、フィールドワークの方針を掲げた箇条に、

○語り手の語る原語を、忠実に記録して、無用な文学的修飾や、自分かつてな主観をいっさいさけること。

○語り手の語り口を生かし、できるだけ、栃尾市の方言をとりにておくこと。

とみえるのが、先の「昔話採集のこと」の記述と類似しており、「ノート」「聞き書き」の語はみえないが、それらを想起させる言い回しなのである。

ところが、これから二年後の一九六五年に入ると、いきなり次のような記述が行われている。それは、「百話クラスの伝承者」（初出『新潟県教育月報』179）の次の一節である。

さて、昔話研究のためには、こういう百話クラスの伝承者こそ

必要条件である。これら百^マクラスの語った話を、そのまま、一人一冊の昔話集として世に残すことが、民俗学にとっても理想である。わたしも、この四人がそれぞれ語り終えたら、そういう本をつくりたいと念願している。今夜になると、わたしはおばあさんの話の録音をもどして、文字にうつし、つ、つある。テープ、レコーダーをとめたり、進ませたりしているうちに、もう、人さし指にタコができてしまった。（傍点筆者）

この文章で紹介されているのは、水沢が一九六五年になってから新たに発見した「百話クラスと思われる四人の老女の語り手」、すなわち宮路ひる媼（当時一〇七話）、池田チセ媼（当時九七話）、下条登美媼（当時九一話）、高野アサ媼（当時六〇話）である。これらのインフォーマントに対して、水沢がテープレコーダー（写真で確認すると、オープンリールのもの）を用い始めたということは、聞き書きよりも、より効率的に「話数」を確保できるようになったことを示しているだろう。テープに録音したことの効率化の一つには、テープの翻字（文字化）作業を水沢以外が行えるということもあった。たとえば、池田チセ媼の昔話集、『おばあ昔ばなし』の「池田チセばあさんの「ムムカン」」には、

昭和四十年の秋には、長岡商業高等学校の速記部のみなさんにお世話になって、テープを文字化してもらったことを、深くお礼申し上げたい。

と記されている。

ここに至って、「百話クラス」を離れて「二百話クラス」を発見

し、形作っていく手法、道具立ては、ようやく準備されたというべきだろう。水沢が「二百話」という語を初めて用いたのは一九六七年のことである。

一人でよく百話も、二百話も語る、ゆたかな「昔話の手箱」をもった、すばらしい伝承者たちである。(中略) このような百話、クラスのカタリバサは、世に知られずにいた話、ほかでは消えてしまった話、分布のまれな話、同じ話でもいちだと古美なタイプの話などの、珍しい話を持ち伝えている。(傍点筆者)

(「雪国の語りばあさん」初出『新潟日報』一九六七年一月二八日)

この新聞記事は、水沢が六七年度の柳田國男賞を受賞したことを自ら報告する内容であるが、ここで水沢は「百話」という話数を明らかにしながらも、それをも包含して「百話クラス」と呼んでいた。それが翌一九六八年になると、同年に発表された八つの文章中、七つにまで「二百話クラス」の語がみえる。下条登美媯(一九〇三年生)がその人である。下条媯の昔話は一九六九年に出版された『赤い聞耳ずきん』(野島出版刊)に紹介されているが、その解説(「『赤い聞耳ずきん』の記」)によると、二五一話を語ったという。この下条媯は、おそらく、水沢の出会った「昔話の語り手」の中ではそうとうに異質な、そうして文字通り画期的な語り手だったと思われる。それは一つには小学校での「話し方」教育を受けた世代であること、また一つには旧制の中等教育を受けていたことである。このことは、下条登美媯が、一九〇〇年前後に生まれた典型

的な語り手の一人だったということのだが、水沢は、右のような経歴には触れるものの、水沢自身の「昔話の語り手」の像は、一九五八年頃に発見され、形作られた「百話クラス」のイメージから一歩も抜け出していない。

〇学のない老女が「ムカシ」を多く知っている。登美ばあさんは、旧制の中等教育を受けており、「ムカシ」のおばあさんとしては、異色である。(「百話クラス昔話伝承者の特色」初出『おばばの昔ばなし』一九六六年)

と、「異色」の語を用いて説明している。先に、昔話の話数を「メモ」によって増やした池田チセ媯については、全くこの点への注意を喚起していなかった。一九五八年当時四〇歳だった筈原政雄翁については、鉄道勤務については触れているが、「書くいとなみ」への注意は、ここでもやはり向けられていない。水沢の「百話クラス」発見のほほ出発点ともいえる長島ツル媯は、小学校へは行かなかったが、

しかし、お婆さんは平仮名は読み書きが出来るのである。子供の頃、お婆さんの家で、正月から二月にかけて、「ヨミナライ」があつて、村の若い衆の、あんにやおじが、「ヨミナライ」に来て机をならべていた。その時は論語や庭訓往來などの読み書きであったという。それを見まねで、いつとはなしに、いろはを覚えてしまったという。(「長島ツルばあさんの昔話」)

とある。してみると、「書くいとなみ」の有無については、水沢のフィールドワークの初発から、既に「目に一丁字なき人々」という

前提に「例外」がつきまとうてはいたのだが、この前提を、下条登美唄に至っても問い直すことはしなかったのである。

四、波多野ヨスミ唄と水沢謙一

水沢のこのような「書くいとなみ」をも心身に構造化した「昔話の語り手」への興味のなさは、水沢の昔話史の見方とつながっている。水沢の文章の中に繰り返しあらわれるいまわしの一つに、昔話は減んでいくもの、というのがある。

昔話の宝庫と言われた越後は、伝承者の発見や昔話採集が、今やそれほどたやすいことではなく、日を追うて困難なことになっていく。すでに伝承度はうすく、保存状況は悪く、昔話の絶滅の日も近いのである。（「昔話採集」初出一九五八年）これなどは、まだ穏やかな言い方で、「私のふるさと」（初出『家庭と電気』一九六七年一月号）などでは、

昔話は、もはやほろびてしまったが、昔話伝承の老女たちがまだ生存していて、数多くの話を記憶している。

と、昔話は滅亡済みになっている。おそらく、この記述の背後には祖父母から孫たちへと昔話を語り継いでいく生きた語りの場の消滅がひそんでいようが、水沢はこのような今だからこそ、自分は日本のグリムのように、童話集を出版し、また、子供たちに語るのだ、と教師としての使命としても自分の仕事を位置づけている。ところで、このような水沢の昔話史の把握、つまり、かつては「昔話の宝

庫」たる状況が続いていたと考えて、今、それはわずかな伝承者の手に、その形骸のみが委ねられている、と考える時、伝承者とは、「今」の人であるはずはないので、「かつて」の生き残りの人なのだ、と考えていたとみるべきだろう。水沢にとって伝承者は、そういう意味で時代を超越した存在として捉えるしかないだろう。実をいうと、筆者はここまで、主な「百話クラス」や「二百話クラス」の生年をなるべく記すように努めてきた。が、実は、水沢は、伝承者の生年を記してはいない。今年で何歳と記してあるばかりである。水沢にとって昔話の語り手と、近代の戸籍を思わせる生年の記述とは結びついていない。

しかし、水沢がどんなに昔話に永遠の時を追い求めようとしても、やはり「今」の文脈・背景の中に彼はいつづける他はない。そうして、皮肉なことに、「近代的」な語り手ほど、仇花のように、話数は二百話クラス、三百話クラスと増えるのである。もちろん、今までみてきたように、話数が増えるのは、水沢自身の手法、道具立ての交替のためということも大きいのだが――。

そのような時の流れの中で、「三百話クラス」の語り手、波多野ヨスミ唄（一九一〇年生）についての記述は、水沢の二冊めの文集『昔話を追って』によって初めてみえてくる。ところで、『昔話を追って』での新しい手法、道具立てとしては、カセットテープレコーダーが挙げられよう。

今は、手軽なカセットのテープレコーダーを使用するのがよい。だんだんなれてくると、再生のときは一べんで清書の文字

に書きとることができるようになる。(「昔話について」初出『社会科教室』一九七四年八月号)

それまでのオープンリールのテープレコーダーは、持ち運びが大きな負担だったのだが、カセットテープの普及によって、一度に長時間分のテープの持ち運びができるようになったのである。この長時間録音の可能性はやがて、一話型Ⅱ物語と二話型ごとに話を分節化するのではなく、「場」Ⅱ物語としてインフォーマントとフィールドワーカーとの間に行われるさまざまな言説のありようを、とりあえず全て録音するという手法を可能にしていた(「場」Ⅱ物語については、高木史人「『口承文芸』の〈場合〉」『日本文学』41—6、一九九二年六月号、日本文学協会刊を参照のこと)。そうして、長時間録音の手法と、とにかく「話数」が欲しい類のフィールドワーカーの欲求とが奇妙な結合をみたところに、まるで昔話の話型研究の後追ひ、自殺を目指すかのような「世間話」の話型の数獲得の、闇雲な競走が行われつつある。現在の「世間話」研究の抱える可能性と危険性とは、しっかりと見据えておく必要がある。^(注八)

水沢謙一の場合、流石に右のごとき「世間話」への闇雲なただれこみという不作法は行っていない。「昔話」に賭けた人物である。その水沢が、一九六九年から七一年にかけて通いつめて三五〇話の昔話を聞いたのが波多野ヨスミ嬢である。波多野嬢と水沢とのフィールドワークの面白さは、二人が共に一九一〇年生まれだということである。同年生まれの二人がテープレコーダーを間に置いて昔話を聞くというのは、水沢の昔話史の見方からするならば、まこ

とに奇妙だ。自分が今、「かつての人」の位置にあるということだからだ。

水沢は「雪国の語りばあさん——老人のムカシを追って——」(初出『新潟日報』一九七〇年三月一九日)に、ちょうど二〇〇話を聞いたころの波多野ヨスミ嬢を紹介する。波多野嬢の昔話は、その語り方が、結論的というならば、水沢自身の「鏡に写し出された姿」そのもののように、筆者には思われる。

波多野ヨスミばあさんは、ムカシのメモをいっばい書きためて、待っていた。(傍点筆者)

水沢と同年生まれで筆マメな波多野嬢に「老人のムカシを追って」とは、考えようによっては失礼な物言いである。しかし、おそらく、水沢には他に表現の術がなかったのではあるまいか。それはともかく、水沢は一九七六年に『ばばさのトントンムカシ——波多野ヨスミ嬢の語る百話』(野島出版刊)を世に問う。その中で水沢は波多野嬢の昔話の特色について、

ヨスミばあさんの昔話の一つの特色は、同じ一つの昔話が、一連の系統をもって、つづいて、出ていることである。たとえば、「三枚の札」だけが七話も出ている。(中略)「夢とハチ」系統の話が(中略)六話もある。木魂信仰を背景にした話が(中略)五話もある。(中略)「運定め話」が(中略)五話もある。

と紹介する。この異様さは、たとえば「桃太郎」を五通りに語り分けるといって理解しやすい。たとえば祖母と祖父と父と母と友人とから聞いた「桃太郎」を語り分けするというのである。この異様さを解

く鍵は、おそらく波多野媼の「ムカシのメモをいっばい」に求められるのだろう。考えてみると、この同一話型をいっばいに書きつけるといふのは、水沢の『越後のシンデレラ』等の昔話集の形である。

共に筆の立つ波多野媼と水沢とのフィールドワークの場が、どんな形で進んでいったのか、たいへん興味があるところだ。波多野媼はどのようにしてこの異様な語り分け——つまり話型の更の一つ下の分類、認識まで行う手法——を身につけたのだろう。

それにしても、水沢が波多野媼の昔話の紹介を「百話」にとどめたこと、ここに出版に関する経済的制約とは別に、一つの見識を認めるのは、筆者だけだろうか。ちなみに、波多野ヨスミ媼のもとには、別に、新潟県で長く民俗学全般のフィールドワークを行った佐久間惇一（一九一四—一九九三）が通いつめ、一九八九年に『波多野ヨスミ女昔話集』（波多野ヨスミ女昔話集刊行会刊）を出版しているが、これには六一九話の話数がフィールドワークの語られた順番に記録されている。これはこれでまた、比較を絶する労作という他はないのであるが、最後に「百話」という手法、道具立てに還っていった水沢謙一。壮絶に全てを知ろうとして『日本昔話大成』をも乗り越えようとした佐久間惇一。同じフィールド、同じ現場とはいうけれども、その実、われわれはそれぞれの手法、道具立てを、ある時は知って、ある時は知らずに駆使して、フィールドを、インフォーマントを「発見」し、「作り上げ」ているのである。小稿は、水沢謙一の注目すべき仕事を通して、その一端を垣間見たというに過ぎない。

〔注〕

注一、柳田國男が「一〇〇」という質問項目数を好んで用いたことは、山村調査などからも窺える。『昔話採集手帖』も、日本の昔話の代表的な型として一〇〇話を提示して、その採集を各地のフィールドワーカーに求めていた。『日本昔話名彙』は、その延長線上に一八三の昔話の型を「目次」において示しているが、その「目次」の末尾には「目次中傍線あるものは百の主なる型を示し他は派生せるもの」と注記してある。そうして、その「百の主なる型」とは、即ち『昔話採集手帖』に提示されている型であった。ということは、ここでの「百の主なる型」とは体系的な存在というよりも、昔話採集のための道具立てという側面が強いのである。

注二、柳田國男「昔話採集者のために」（『昔話覚書』所収、初出一九三一年、ここではちくま文庫版『柳田國男全集』に拠った）。

注三、「常民」の語については佐藤健二『読書空間の近代』（一九八七年、弘文堂刊）、「昔話」の語については重信幸彦「『昔話』の発見——ある口頭伝承研究史の構想・覚書①」（『八口承研究の現在』、一九九一年、筑波大学日本民俗学研究室刊）、「世間話」の語については同「『世間話』再考」（『日本民俗学』180、一九九〇年、日本民俗学会刊）を参照。なお、「民俗語彙」の語については鈴木寛之の今後の研究成果に期待したい。

注四、これには柳田の次の記述も影響している。「一人で百にも近い話の数を知って居る人を見つけて出すといふことが特に必要なのであるが、(後略)」（『編纂者の言葉』『全国昔話記録』一九四三年、三省堂刊）

注五、たとえば野村純一編『昔話の語り手』一九八三年、法政大学出版局刊など。

注六、高木史人「語りの『声』」（山下宏明編『平家物語——研究と批評』、一九九六年近刊、有精堂刊）参照のこと。

注七、この点は近年の口承文芸関係の資料集のあり方を検討する上で重要であろう。なお、吉澤和夫「民話の再話——作家と研究者とをつなぐもの——」（『昔話——研究と資料』22、一九九四年、三弥井書店刊）では、水沢を甲式記録の速記によって、フィールドワークをしたと紹介している。注目すべきことである。

注八、たとえば、遠くアメリカのジャン・ハロルド・ブルンヴァンの一連の「都市伝説」の資料集、研究書のあり方は、素材の可能性は認められるとしても、そうとうに危険である。一例を挙げるならば、「消えるヒッチハイカー」の話を集めて資料集、研究書として「出版」した途端に、現代の「都市伝説」は、人口承りだけではなく、さまざまなメディア状況の中に棲息するから、その書物自体が、一つのメディアとして機能して、話の拡散や生成に寄与し、話のサイクルに取り込まれていくのである。このことを相対化しつつ「都市伝説」を論じていく力技に、筆者はなかなか廻りあえずにいる。間近くは「学校の怪談」

等を考えてみるとよいだろう。そうして、この点において「柳田國男」の力技は注目に値するのである（注三佐藤健二文献参照のこと）。

注九、『ばばさのどんとん昔』の「まえがき」に拠る。

注一〇、高木史人「書評 佐久間惇二編『波多野ヨスミ女昔話集』」（『国学院雑誌』89-5、一九八八年刊）

付記、すぐれたフィールドワーカーについての議論を、われわれは、「フィールドワーカー論」として進める必要があるように考えている。水沢謙一、佐久間惇一、いずれも個性的なフィールドワーカーだった。小稿を両氏に捧げたい。また、続稿も計画している。

（たかぎ・ふみと／フェリス女学院大学非常勤講師）